

『暮らしの手帖』にみる経済大国化の中の住生活

梅原清子

The Dwelling Life during Japan's Growth into a Major Economic Power
through the Case of “*Kurashi-no-Techo*”

Kiyoko UMEHARA

2003年10月14日受理

Through the years it has been a practice to inspect pictures of one's dwelling life during the years following WWII. This report uses the record of dwelling life appearing in the magazine, *Kurashi-no-Techo* in issues that appeared over the 15-year period from 1974 to 1988, from the end of high economic growth to the height of the Bubble Economy at the point just before the Showa Era ended. The following factors became clearly evident.

With the rising call to save energy and save resources, general consciousness of the environment rose. The focus of the average person shifted to include not only life at home, but outside the home as well and to regional areas. Despite the fact that there was material abundance, the quality of housing was low and efforts became directed at raising the quality level of housing. However, as land prices shot upwards, this became harder and harder, and the housing market was subjected to high loans and land sharking. Meanwhile, the focus began to shift away from things and more toward riches of the spirit and rich human relationships along with growing tendencies to create life styles that placed more importance on being one's self. Regarding multi-unit dwellings, there was a search for not only functionality, but a growing search for personal amenities, for possibilities of living together with elderly persons and for greater diversification of life styles.

1 研究目的

失われてしまいやすい日常生活レベルの記録を具体的に掘り起こして、私たちの住まいの変化を検証していく。これまで前報¹⁾・前々報²⁾において、戦後復興期から高度経済成長期までをみてきた。そこで本報では、その後続く、経済大国と世界から目された時代、高度成長期後から昭和が幕を閉じるバブル経

済期まで、すなわち1974年～1988年の15年間に重点をおいている。

2 研究方法

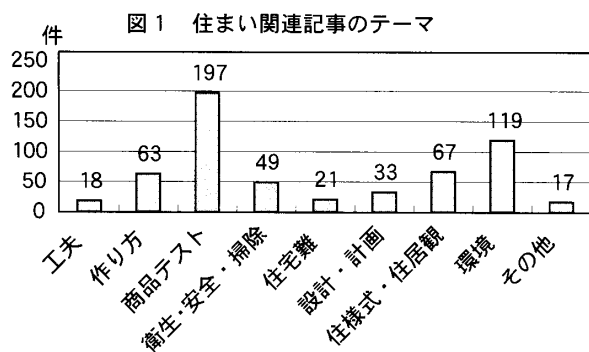
方法はこれまでと同様である。対象となるのは、暮らしの手帖社刊『暮らしの手帖』Ⅱ世紀28号からⅢ世紀17号までの90冊である。なおここでは便宜上、通し番号を用いて128号から

217号とした。

3 結果および考察

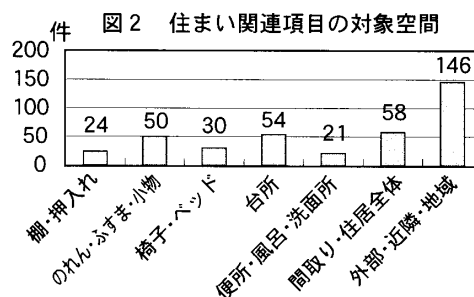
(1) 住まい関連項目の分類と量的把握

本誌90冊、15年間分において掲載された住まい関連記事を抽出したところ、584件であった。平均すれば毎号6.5件の掲載となり、これは、前回¹⁾の場合とほぼ同数となる。図1に示すように、記事のテーマで最も多いのは、



商品テスト・商品案内の類で197件34%、次いで「環境」が119件20%である。環境項目は70年前後から増加傾向にあったが¹⁾、今回急増したのが特徴である。また商品テスト項目が最多を占めるのは、本誌の性格上、当然のなりゆきであろう。しかし本誌初期の頃に顕著だった「ちょっとした工夫」と名づけた項目²⁾は、今回は18件3%を占めるに過ぎず漸減が著しい。他項目では、変化特徴は殆んど見られない。

次に、上記の記事が、住空間のどのような部位を対象とするかについて読み取り、図2に示した。ただし、「商品テスト」の対象となった家具什器等で分類不能なものについては、ここでは除いている。図2でわかるように、「外部・近隣・地域」に係る記事が146件と抜きん出ている。「環境」への関心が増大したことと軌を一にするであろう。反面、台所や住

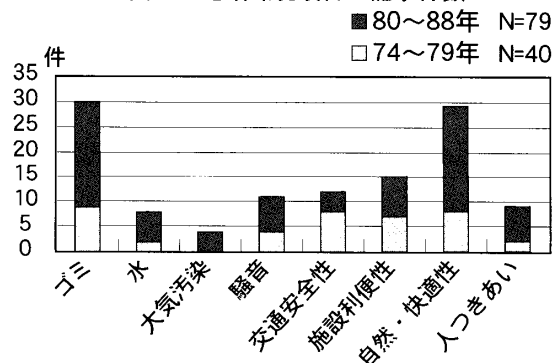


居全体などの空間が後退している。それまで本誌が果たしていた、台所改善や住宅設計など暮らしやすい住まいづくりの情報源としての役割を、ここに至って追隨してくる他誌に譲る面もあったと思われる。

(2) 環境問題

増加の顕著だった「環境」をテーマとする項目からみておこう。それらを分類すると、図3のようになる。ゴミに関する記事が30件、

図3 地域環境項目の記事件数



地域の緑や空間の快適性に関するものが29件、この2つがとくに目立っており、他には、騒音、水問題、大気汚染などの環境問題、および道路や地域施設の安全性・利便性を訴えるものも見られる。また、これらを70年代と80年代に分けてとらえると、件数計は各々40、79件であり、全体としては後半期により集中的であることが把握できる。

さて環境問題は、この時期の最大課題といってよい。環境問題は、高度経済成長のいわば「陰」の部分である。四大公害病に代表

される各種の環境破壊が深刻化していく中で、1967年公害対策基本法が制定され、71年には環境庁が設置された。72年ストックホルムで「人間環境会議」が開催されるなど国際的視野の広がりの中で、国、地方自治体、あるいはN G Oをあげて種々の活動が展開されることとなった。本誌でも既に、116号(72年)において編集長花森安治が使い捨て社会を真正面から批判し、その後も類似のキャンペーンが2, 3続いてはいるが、当時はまだ一般読者層へ浸透するまでには至っていないように見受けられた⁴⁾。今回は、記事件数の増加とともに、多面的なアプローチが見られる。

まず、ゴミに関する記事は多かったが、中でも目立つのは、空容器ゴミに関するものである。79年161号の「空カンと戦ったオレゴンの人たち」では、美しい自然を守るためワンウェイ容器の散乱を防止して空き缶のデポジットに取り組んだ米国の先進的運動が紹介される。デポジット制度は、商品代金に預かり金を上乗せしておき空の容器を返すと戻ってくる、という経済的手法によりゴミ減量化をねらうもので、日本でもビール瓶や一升瓶で実施されていた。これを空き缶にも適用しようという提起である。以後162, 169, 172, 177, 178, 184, 217の各号で空き缶デポジットの情報が載せられる。つまり、デポジット制度を条例化する運動や制度を採用した自治体、5円で買い取りを実施している地方ビール会社、そしてビジネスとして空き缶収集企業を設立した第3セクターなど、空き缶回収の実践の数々がある。空き缶とくにアルミ缶は、原料のボーキサイトから生産するより回収再資源からつくるほうが、97%の電気エネルギーの節約になる。したがって回収アルミ缶は地球環境にとって有用な資源であること

は、今日では周知のことになってきた。結局、空き缶のデポジット制度の普及は一般化したとは言えないが、アルミ缶リサイクル率の方は82.8% (01年、アルミ缶リサイクル協会調べ) をあげるまでになっている。さらに空き缶以外のゴミ、過剰包装や使い捨て容器全般の問題を指摘して、136, 134, 162, 169, 187の各号があり、168号では西ドイツの例を引き合いに自らの責任で減量・処理するためゴミ収集有料化の実施、181号では商品の販売にトレー使用を廃止した高知市のスーパー、など内外の先進的な試みが紹介される。あるいはまた83年185号には乾電池の廃棄について問題提起をおこない、188, 194, 200号に継続する。乾電池は有害物質の水銀を含み環境に放置されると土壤汚染をもたらすとして回収することがアピールされる。また162号では、ティッシュペーパーについて、年間消費量(アメリカ人より多いという)、1世帯当たり置かれる個数、用途、などについて商品テスト風に詳細に取上げた。箱入りティッシュペーパーは64年に販売が開始されたが、「ささやかな日用品から、ほとんど意識することなく日本人の生活スタイルが変わっていく」⁵⁾ 使い捨て商品の典型である。読者からは、汚れ拭き取りに雑巾とティッシュで使い比べ、予想を上回るティッシュの山に自ら納得したという報告(163号)や、あるいはまた買物袋を持参してレジ袋を断る、しょう油はビン入りしか買わないなど、ゴミをつくらないことを「生き方の問題」として実践する投書(169号)もみられた。

人びとの生活を耐乏から物の豊かさへ、禁欲から物欲へと変えていったのは紛れもなく高度経済成長である。企業のマーケット戦略は<浪費を刺激する>であり、大量生産・大

量消費、その結果としての大量廃棄がある。簡便さを追い求めるが故の使い捨て商品の数々と容器包装材。そういう生活を当たり前のこととしてきた使い捨て文化に対して、ゴミを減量し資源を守るリサイクル文化への転換が共通認識として囁かれ始めたといえる。ただ、記事全体としては生活系のごみに傾斜している。つまり量的には一般廃棄物の6、7倍を占めるといふ産業廃棄物についての言及は、まだ殆んどされていない。

その他、騒音、水の環境問題もある。騒音では、11件のうち交通騒音が7、生活騒音が4である。前者はとくに新幹線沿線住民の騒音被害を問題にしたもの(137、175、180号、他)である。本誌に伝える形で当時の国鉄副総裁が寄稿し弁明にあたっている(139号)。経済発展は国土開発として突き進み、国民生活への甚大な影響が現れる。基地周辺のジェット機騒音もあり(196号)、政治や経済の問題と捉えられている。これに対して、197号の「みなさんお静かに」は近隣騒音・生活騒音の実情を述べ住生活上の対策を呼びかける。防振マットやじゅうたん敷きなど防音の工夫も詳しい。他方で、生活騒音の多くは昔からあったはず、とし「つきあいの程度でうるささが違う」ことが調査結果(山本和郎による)に基づいて示される。74年に起こった「ピアノ騒音殺人事件」は世間を震撼させたが、集住の度合いに反比例するかのようにな隣のコミュニケーションが失われ、トラブルを増幅してしまう仕組みが明らかになってくる。

水問題については、オーバーフロー型の洗濯機の水使用量を調べ数字で比較した129号など節水に関するものもあるが、大半は水の汚染防止についてである。汚染防止では家庭

からの排水が汚染原因となる点を説き起こし、防止するための下水道・合併浄化槽の設置推進(213号)や、ディスプレイの害悪について(216号)も触れられる。

私たち消費者のライフスタイルが地域環境に、ひいては地球環境問題に深い関係をもつことが認識されるようになったのである⁶⁾。

(3) まちづくり

環境問題の中の、社会的、文化的環境についてまとめておこう(図3 参照)。施設や都市という人工環境をどのように、守り、つくり、育てるか、といった視点は、生活の安全性や利便性、快適性にとって不可欠である。

140号の「人間の歩く道はもうどこにもないのか」は<自動車優先>社会への警告である。交差点の歩行者信号の時間を踏査して車の横暴をカメラでとらえ、横断歩道を渡るのにすら危険な実態を暴く。<歩行者優先>の実効化のためには車とくに乗用車を減らさねばと主張する。142、147、147、175、153号など、いずれも車社会の批判である。また「歩道の電柱」(146号)は、歩道をふさいで立てられた電柱のため、視力障害者が車道を歩かざるを得ないことの見聞である。ちょうど、日本にバリアフリーの概念が導入され、これを意図したまちづくりが提唱され始めた時期であるが⁷⁾、このような日常における素朴な問題意識の集積が、高齢者、障害者そして一般の人々にとって住みよいまちづくり、生活環境整備の施策推進の端緒となるであろう。

公共的施設の利用のしやすさについての要望も多い。役所は昼休みも利用できるようにしてほしい(139号)、自動エレベーターは操作盤の規格を統一してほしい(147号)、急ぐ時のために婦人用トイレに男児用もつけてほしい(150号)、など些細なようで大切な、そ

して現在は多くが実現している要求が並ぶ。193号の「深夜バスをふやしてください」は、バスの最終は電車より早くて利用できない、頼みのタクシー乗り場は長蛇の列、ぜひ深夜バスの運行により地域の足を確保してほしい、というものである。都市のサラリーマンにとって遠距離通勤や残業が常態化していること、また住宅地の郊外化が進行している実情が浮上する。

地域の福祉施設の不足も問題となる。「これが無認可保育所です」(147号)、「夜10時までの保育園」(183号)、遊び場確保のための「学校開放」の試みを取材したもの(195、203号)など、いずれも、追いつかない公共的整備の穴を埋めるための施設や制度として、先駆的な事例を取材・紹介し、それに依拠して今後の課題があげられる。また、「老人保育所」(197号)は、現在のデイ・ケア、デイ・サービスに近い試みである。周知のように、日本は1970年以降、高齢化社会に突入し急速な高齢化の進行が社会問題化する。寝たきり老人や痴呆性老人の問題も顕在化しつつあった。しかし本誌に見る限り、高齢者の住生活を問うものは希少であり、上記事例は、高齢者福祉が本格的始動に至る以前の、地域福祉の先駆的試行として注目される。

自然や快適性に関する項目は突出して多いものだったが、代表的な例としては以下のようである。まず、「森のある小学校」(162号)は、教師と子ども、地元の人たちが力を合わせて、校内に人工の森を手作りした話。悪名高い環七の車公害から子どもたちを守る目的ではじめられたが、10年後には青々と木々の生茂る美しい自然となり、小鳥の楽園に、子らの憩いの場へ、そして地域のシンボルへと育まれた。また、自動車の締め出され

た緑道を「正々堂々と」歩き、失っていた爽快感を蘇らせたという「毎日が歩行者天国」(173号)、以前のドブ川を子どものはねまわる川に甦らせた親水公園「川は流れる」(179号)のほか、「緑の広場」(199号)、「道端のオアシス」(173号)、「東京から海がなくなった」(203号)なども、緑、川や海という自然の豊かさがテーマになっている。殊に高度成長による環境破壊を目にしたことから、生活の場の心地よさにとって自然がいかに大切かを認めることとなったといえよう。

「お祭りづくり」(168号)は新興住宅地の居住者の投書である。子どもらの思い出になるようにと、有志でお祭りを開催し、おみこしをつくり売店を出し神社の分社までつくった。「太鼓の音が家々にひびきわたった日、ふだん挨拶もしないですれちがっていた顔と顔が笑い声の中でひとつになっていた」という。さらに157号の「私たちの冒険」は、子どもの遊び場に関して、いままでの安全至上の考え方を根底から変えることになった冒険遊び場についてである。翻訳によってこれを海外から初めて紹介した大村璋子は記す。開設にむけて乗り出した母親たちにとって、「自分自身の頭も切りかえなければならぬ冒険」だったと。現在全国的に注目されるようになった「プレーパーク」の嚆矢である。

これらの例は、快適な居住空間をつくるには、機能性が充足されるだけではなく、自然環境との調和や、人工環境の作られる過程に込められた人びとの知恵やつながりが、殊に重要な意味を持つということを示唆している。

(4) 住宅・土地問題

投書等によりわが家の暮らしを開示したものの中から、住宅困窮の状況が読み取れる記事を採用したところ、15例となった。表1に、

記事タイトル、家族構成、現住宅と問題状況について、判明する事柄を年代にそって示した。いくらか補足しておこう。

129号の「土地成金よ…」は、女手一つで子どもを育て上げた戦争未亡人が、これまでの辛酸とこの先の絶望的な住宅事情を抱える戦争遺族の立場から、金儲けの手段と化した土地売買の不公平さを糾弾する。次の「せまいながらも」(135号)は、新婚生活には十分のはずだったアパートだが、雨漏り、騒音、結露…と次々明るみになる問題に悩まされるも、家賃のことを考えると転居もままならない。日消連の竹内直一による『欠陥住宅一幻のマイホーム』の出版(72年)、「マンション問題を考える会」の結成(76年)など、欠陥マンション・欠陥住宅が社会告発され始めた頃である。129号「はかなし」は、市の造成した墓地を購入し転売して利ざやを稼ごうという妻の不逞な言種に憤りつつも、住む土地も持てない自分を忸怩と省みる話である。162号「埴生の宿も…」は、安住の地ときめていた3DKの公団分譲アパート、5年もすると隣近所は引越しの続出で、妻はうわごとのようにああ引越したい、という。いまや<庭

付き一戸建>は<住宅双六の上がり>であり「男の、地位の象徴であり威信を誇示するもの」と肩身をせまくする一家の主の悲哀感たよう投書記事。166号「夫が無言で私の眼をみていた」は、中古住宅の下見をしたが予算がオーバーし、首を縦に振らない夫に妻は心の中で「甲斐性なし」と毒づく。住居の貧困さは、家族の間に軋轢を生み出し、家庭不和の誘因ですらある。

マイホームの魅力は、それにしても絶大である。163号「なによあんなプレハブなんて」は、売り出し中の新築住宅を下見してすっかりマイホーム気分であれこれ思い描いていた夢が、高倍率の抽選にはずれてもろくも破れ去る。173号、195号も、同様の趣旨で、つかの間の夢からさめた、無念と未練の弁。また、212号の「高層マンション変じて…」は、日当たりのいいマンションを買うつもりでこつこつ預金して、いざと思った時にはすでに手の届かぬ値段に。頭金になるはずだったお金で羽毛布団を買っちゃおうか、という。地価高騰は、人びとのささやかな願いを打ち砕く。

マイホームに突進した人もそのツケは重い。149号の「ああ海はタダなり…」、183号「ね

表1 わが家の住宅問題

| 号数 | タイトル | 家族構成 | 住宅種別・家賃等 | 問題状況 |
|-----|-----------------------------------|---------|--------------|-----------------|
| 129 | 土地成金よ、死をもってあなたの土地を守ったのは誰か | 母・成人息子 | 家賃3万 | 土地もなく住まいでは苦勞ばかり |
| 129 | はかなし | 夫妻・? | ? | 墓造成地で儲けるなんて |
| 135 | せまいながらも | 夫妻新婚 | 家賃4万、1LDK設備完 | 欠陥が続出 |
| 148 | 宅地買ったが家はムリせめて大根作って沢庵をつける | 夫妻・幼児 | 土地購入 | 本格的日曜百姓に |
| 149 | ああ海はタダなり空もタダ浜もタダ親子4人タダ遊び | 夫妻・小・幼児 | 新築ローン800万 | 生活費圧迫、節約生活 |
| 162 | 埴生の宿もわが宿玉のよそいうらやまじ | 夫妻・? | 公団分譲、3DK | 団地内で引越しが続いて |
| 163 | なによあんなプレハブなんて | 夫妻・幼児 | 分譲3DK団地 | 抽選に外れて夢消える |
| 166 | 夫が無言で私の眼をみていた | 夫妻・小 | 雨漏りする建売 | 高値に中古すら買えない |
| 173 | ああ我家候補が人に取られた | 夫妻・幼児 | 2DK | 抽選に外れて夢消える |
| 179 | ささやかなねぐらを求めてさまよい歩かねばならぬ私は57才戦中派 | 夫妻・成人娘 | 社宅、転居10数回 | 住宅物色するも遠距離しか |
| 183 | ねえみんな聞いて今日只今ワタシ住宅ローンを完済したのよバンザーイ | 母・成人息子 | 分譲マンション | 12年間のローン返済を振り返る |
| 195 | 確率187分の1に怯んだのがいけなかったか展示場建物は他人の手に | 夫妻・中・小 | 社宅、土地は確保 | 娘たちに部屋を、抽選に外れる |
| 198 | 43坪で充分です給料日前の結婚記念日に唯一の財産の草刈をしてみると | 夫妻・幼児 | 社宅、土地は購入 | 家を建てぬまま草おい茂る一面に |
| 212 | 高層マンション変じて羽毛布団となる | 夫妻・幼児 | アパート狭・日当たり悪 | 土地高騰で購入予定が頓挫 |
| 215 | 14号の花だいこん | 夫妻・小・親 | 38年間住んだ借地 | 都心地上げに泣く泣く引き払う |

小:小学生、中:中学生

えみんな聞いて…」のように、ローンの重圧は覚悟の程をはるかに超える。町に遊びにも行かずあらゆる出費を切り詰めて暮らす人たちがいる。ローン返済不能による一家心中のニュースに我が事のように涙する人たちがいる。土地は手に入れたがそのさき住宅を建てるまでには順調でないケースもあり、日曜毎に町から農作業に通いつめる人もいれば(148号)、生い茂る雑草を放っておけず草刈をしてみると、狭いはずの土地も43坪で充分です…となる人もいる(198号)。

バブル期、大都市では地上げ旋風が吹き荒れた。東京のまんなか、いつも楽しみに通りかかる四季折々の花の咲く家に、ある日異変が起こる。その庭はブルドーザーでふみしだかれ、残されたのは境界沿いの斜面一面に咲く花だいこんのみ(214号「花だいこん」)。「あの花を植えたのは私です」と、直ちに元の居住者が名乗り出ているのが深長であるが、地上げによって土地を引き渡さざるを得なかった経緯が明らかにされている(215号)。この、社会問題化した「地上げ」の現実をジャーナリストの黒田清がレポートした(210号「戦争がなくても平和ではない」)。住み慣れた家が壊され住人が追い立てられ生活が破壊される、これを平和繁栄と言っているのかという懐疑である。215号「都会の過疎に生きる」は、地上げ屋の跋扈する東京は麻布で魚屋を商う一家の生活の記録であるが、ここでも、客が半減した、魚の好みが変わってきた、とまちの変貌ぶりが生活の中で実感されている。

再開発めあての地上げ旋風は、都市の地価高騰に起因する。80年代後半、日本経済の、円高不況を乗り切るための公定歩合引き下げは景気過熱を呼び「バブル経済」が始まる。

地価・株価が高騰し、東京都心部商業地を震源とする地価高騰は、やがて東京圏全域に、大都市圏に、全国主要都市に、リゾート地に、と1,2年のタイムラグを持ちながら全国的に波及した。88年には三大都市圏住宅地の対前年地価変動率(地価公示)は実に47%を示す。住宅を求める人びとにとっては、住宅価格は年収の5倍にも引き上げられマイホームは絶望視されたのである。

ところで、「日本はウサギ小屋に住む仕事中毒者の国」とECの内部文書で揶揄されたのは79年のことである。『住宅統計調査』によれば、68年には住宅総数が世帯総数を上回り、住宅問題は量から質へと転換した。高度経済成長は、所得倍増と生活水準向上を実現させたが、住まいは取り残されたのである。大量生産＝大量消費の耐久消費財導入で一層手狭になった住まいはまさにウサギ小屋。本誌の事例では、表1に見るように、公団や社宅など一応の住まいは確保され、まだ子どもの幼い若年世帯が比較的多い。つまり前報までのような同居や極限的な狭さや設備共用という深刻な問題は、相対的に減少したと推量される。統計上も、住宅の平均延べ面積は、年代とともに漸増しつつあった。しかし、一億総中流の生活意識は、もっと広くて質のよい、あるいは庭付きの住まいを求めて、住宅への不満をつのらせるばかりであったろう。マイホームはなくても買い物はマイカーで、という暮らしの描写も度々見られるところである。「経済大国は住宅小国」といわれた所以である。そして、その底流には、土地は値上がり続ける・土地は最良の資産という「土地神話」が人びとの意識にインプットされ、そのことがマイホームを持たざる者の焦燥感を駆り立てることになった事情が横たわる。言う

までもなく、バブル期は土地神話の絶頂期であった。

(5) 高級化、個性化、選択的消費へ、

消費が飽和状態となり、物と情報が豊富に提供される状況にあつては、人びとは自分の嗜好や個性を追及できる「選択的消費」の可能性が生じてくる。本誌において、趣味的なもの、高級なイメージのあるもの、個性的なものとして、次のような事例をみた。

172号の「テーブルセッティング」は、花やキャンドル、テーブルクロスなどで、欧米家庭の優雅で色彩豊かな食卓を演出してみせた。また菊竹清訓のポップ・アート風インテリア・デザインのグラビア「部屋の絵本」(208、211号)も登場している。210号「トイレを住みよくたのしく」は識者宅の「トイレ拝見」である。ここに取上げられた6例のトイレはいずれも、床や壁の配色、インテリア・グッズで個性溢れるものばかり。わずかな時間ではあるが季節の切り花をゆっくり眺め、清々しく過ごすとの記述もある。トイレは「暗くて汚い」か「白くて変哲ない」という思い込みから放れ、わが家のこだわりの一角へと変身させようという訳だ。一点豪華主義というか狭いスペースだけに「その位なら」と思わせてくれるところもある。

ところで本誌は、従前より台所改善について、シリーズを組むなど大量の関連記事を持ち¹⁾、このテーマには心血を注いできたといつてよい。しかし今回、台所の設計・計画そのものをテーマとした記事は4件に過ぎない。もはやテーマは出尽くし台所改善は行き渡った、とみることもできる。145号「リビングキッチンと独立した台所」はそのタイトルの通り両者の長短について概説するが、住まいの中で「リビングルーム」が定着したと見

ることもできる。さらに201、204号においても各種台所の実例写真をあげて、それぞれを評定する方式をとっている。注目されるのは、これら各号に掲載された写真10例の台所のデザインが、従来のキッチン・セット型3例、高級感ある最新のシステム・キッチン型7例と、後者が前者を(例数は少ないながら)上回る点である。システム・キッチンの普及が前提とされるのがうかがえる。ただしシステム・キッチンを単純に理想化するのではなく「見た目の良さより使いやすさ」が肝要であるという、本誌のスタンスの堅実性は確保されているのだが。その批判的に検討する姿勢は217号「私の台所てんまつ記」により明確に表れている。

なお、本報では商品テスト項目については詳しく取上げるいとまがなかったが、この時期、概していえば、電子レンジ、FF式温風暖房機、大型冷蔵庫、ソーラーハウス、など数々のニューフェイス、しかも高価格商品の出回りを見ることが出来る。その代表格としてのパーソナル・コンピュータについて触れておこう。193号(84年)に石田晴久東大教授による「パソコンとはこういうものです」がある。草創期のパソコンの仕組みを説明し、主に家庭で役に立つ道具か、子どもに買ってやってよいか、の2点から述べてある。著者の結論は、家庭の中では実用品でない、子どもにはゲーム用で十分、パソコンより友達と遊べ、と単純明快である。しかしこれも今となっては隔世の感ありで、その後の情報化とくにインターネットの普及は予測をはるかに超え、パソコン普及率57.2%(02年、『消費動向調査』)と、パソコンの生活ツール化は著しく進行している。

さて、この地価高騰の折りしも、都会人に

は夢のまた夢の6百坪の土地を買ったのは、「フィットンチッドどっぷり浴び森林浴」(210号)である。もっとも別荘地として売り出されたもので、車で通勤する予定をしている。目下は山仕事兼ピクニックに毎週通っているのだが、伐った丸太の皮はぎに精を出し、飽きるとこんどは「自分の土地」を探索してワラビや山椒を摘み取る自適の生活である。また「自分で自分のモノを始末する」(215号)のように、山奥に藁葺き屋根の家を借りて生活しはじめた夫妻の話もある。困るのはし尿の処分。意を決して汲み取り、穴を掘って埋める。近所の農家もしていることだが、都会育ちの自分たちだってできることに「小さな自信と喜びを見出しはじめた」とある。上記2つの事例は、土地入手が困難になった都市を見限って田舎に居を移すという事情があるだろう。ありきたりのマイホームに固執せず、不便に耐えながらむしろそれを楽しむ「逆転の発想」が注目される(前述した表1の148、198号にも共通する面がある)。あるいは、溢れる自然の中でdo it yourselfを味わう、という自然志向・手づくり志向の表れともよめる。現在のようにアウトドアリビングがトレンドとなる以前の、現実的な暮らしの中から生まれたものではある。時を同じく、野外用コンロ(202号)、レジャーテント(214号)のようなアウトドア用品の商品テスト記事があるのも注目される。

「飢餓もまた幸せ」(207号)は、デザイナーの水野正夫のエッセイである。彼は物に埋もれた生活から脱出を図って、大量の衣類・食器・本などの家財を処分した(愛着あって捨てられないので田舎に疎開させた)。結果は「物に飢えたら、物が見えるようになった。親しみを持って(中略)物を丁寧に扱い、使

うようになった」という。物の過剰保持の現実と、それがいかに自分たちの生活と空間を蝕んでいるか得心したのである。

これらの例をみると、自分が住むことを楽しむためにこれまでとは違う生き方を模索し始めているように見える。物の豊かさは生活の豊かさとは別物である、という価値観の転換が呈されるようになった、といえようか。

(6) 集合住宅の多様化

この時期、集合住宅とくに共同住宅が急速に増加している。全国住宅総数に占める割合は1963年12.5%であるが、73年22.5%、88年30.5%、となる(『住宅・土地統計調査』)。ちなみに最新の98年は、37.5%、大都市圏に限ると48.5%、およそ2戸に1戸が共同住宅ということになる。かつて本誌は28号(55年)の記事で、アパート生活は都市居住の必然的な方向、と予想したが⁸⁾、数値的にはその通りとなった。戸数が増えただけでなく、1戸当たり面積や設備の充実、さらに様々な設計計画上の新しい試みが加わってきた。

「無一文で新築の3DKを手に入れる法」は、前報対象の106号の記事である。都内は大田区、元軍需工場のオンボロ寮に住む18世帯が、協同して土地と建設の資金融資を受け、新しく「堂々たるマンション」を建設し入居した(69年竣工)。「土地ナシ資金ナシ担保ナシの<無一文集団>が建てた信じがたい話」と本誌は記す。コーポラティブ住宅の日本最初の事例は68年の「コーポラティブハウス千駄ヶ谷」とされ、その後数年にしてコーポ住宅運動へと発展していく⁹⁾。したがって大田区の件は、時期的にはきわめて早い事例として注目しておいてよい。もっともこの事例は各戸の自由設計ではないので、厳密には以下の例の方がコーポラティブ住宅の典型としてわかりやす

い。「サラリーマン43人自分たちでつくった自分たちの家」(167号) および「10組の共働き夫婦がつくった10軒の家」(214号) がそれぞれである。前者は、ミニコミ誌で呼びかけて集まったサラリーマン集団が勉強会を開始、自分の好みに合わせ思い通りの家をつくった。中庭を囲む中層建てとタウンハウスで79年竣工。後者は、子どもの保育園仲間が集まって土地探しからはじめ、中層のコーポラティブハウスを建てた。85年竣工。参画者の構成や進行のプロセスは異なるが、いずれも勉強会・準備会開始から3ヵ年という年月を費やし、入居者相互の十分な意見交換・意思疎通をはかりながら進めている点は共通する。とくに後者は、「まるで現代版長屋の暮らし」であり、助け合い、遊び合い、喋り合いをする大きな家族のよう、よくある音の問題もここでは「騒音」にはならないという。協同方式による住宅の建設・管理はもちろん、生活共同体として生活創出するあたりは、むしろコレクティブの性格が強い。

コレクティブハウスといえば、「平和テラスという名のアパート」(201号)がある。アメリカはシカゴの話。これが他の高齢者用アパートと違うのは、日系人中心に働きかけて作られたことで、異郷にあっても集まって助け合い、余生を楽しく生きていく場をつくりたい、という願いの込められたものであることだ。個人のプライバシーと自由を前提としながら、食事の一部共同化や行事・グループ活動も組み込まれる。運動開始後15年をかけ、80年に完成した。これを受けて202号には、日本にもこうした施設を切望する読者の声がある。若い頃から賑やかな生活をしてきたが、子育ては終わり、友人や夫にも先立たれていくという80歳近い老女である。生きがいを

もって自立して生活の幅を広げることの出来る、つまり高齢者の尊厳が保証される住まいとはどうあるべきか、高齢者の住宅問題を示唆する1例である。

一方、「フリープランという名の賃貸住宅」(209号)は、住都公団・光が丘におけるフリープラン住宅の例である。集合住宅でありながら、個々の入居者の好みにあった間取りや設備を造ることを可能にする方式である。しかも賃貸住宅としては珍しい試みで、それだけに入居・退居のルールなど課題も多いが、経済的負担は少なくすむという利点がある。現にここに入居する家族の事例3戸が開示される。あるいはまた、当初から間取りの決まっている規定型のマンションも、改造により個性的な住まいができると、5つの事例を一覧してみせた「部屋の改造アルバム」(183号)も参考になる。3LDKの限られたスペースや間取りの中で家族に合わせて住みやすいように工夫の可能性が示される。

以上のように、集合住宅の多様な発展方向を示す例を、(とくに80年代には)多くみることが出来る。集まって住むために合理化されただけのハコではなく、居住者が主体的に関わることによって、より個性的で豊かな集合住宅のあり方が追求されようとしている。

4 結語

日本経済は74年に戦後初めてマイナス成長となり、高度経済成長時代は終わりを告げた。本報は、この高度成長のツケの時点からバブル経済の絶頂期、昭和の終焉を迎えるまでの15年間を対象に、人びとの住生活の移り変わりについて検証した。雑誌『暮らしの手帖』から抽出される具体的な住生活の記録には、以

下のような時代の傾向が読み取れた。

石油ショック後の省資源・省エネのかけ声とともに、環境への意識が触発された。人びとの住生活への関心は、住宅内部に限らず外部・地域環境へと拡大し、自然と人の調和のある総合的な快適空間を求める声が強くなった。また、物質的豊かさは有り余るほどになったにもかかわらず、住まいの満足は得られず、居住水準の向上が求められている。人びとは、ささやかなマイホーム願望を持つが、ローン債務は重く生活を圧迫する。ことにこの時期、「日本列島改造論」と「バブル経済」とによる2度の地価暴騰に曝された人びとは、マイホームを願望しつつ諦め、地上げに住処を追われ、という経済的住宅問題に翻弄されることになった。集合住宅については、住むための機能性を満たすだけでなく、より個性的で豊かなあり方が追求され、高齢者の共同生活の可能性なども秘めた、多様性・発展性が示唆された。さらに、物より心の豊かさに重きをおく、自分らしさを大切にする意識や生活スタイルの萌芽もあらわれた。

ここまで、人びとの住生活について、戦後から昭和の時代がおわるまでを3期に分けて、世相史的にみてきた。物質的には貧困ながら長い戦争から開放されて突き抜けたような明るさを持ち、住まいの工夫の数々がすべて生きることに繋がると実感できた昭和20年代、生活革新の名の下、家電製品をはじめ様々な生活用品を手にして住まいの近代化をすすめたが、その急激さのあまり、生活の歪さを招いた高度経済成長期、そして本報である。もとより、これらにおいてカバーし得たのは住生活の一部にすぎないし、またその後の平成の時代になって修正や飛躍を重ねたものもあ

るだろう。また、ある意味では特異な編集姿勢を貫く『暮らしの手帖』という史料の制約上の問題もある。これらを念頭におきつつも、なお、現在私たちの生活に根付いている事物の「物のはじめ・事のはじめ」について来歴を知り、住生活の今とこれからを考えることができた。ここで一連の稿を終えたい。

引用・参考文献

- 1) 拙稿「『暮らしの手帖』にみる高度経済成長期の住生活」和歌山大学教育学部紀要（教育科学）第53集、2003、PP151-163
- 2) 拙稿「『暮らしの手帖』の事例からみた戦後の住生活」和歌山大学教育学部紀要（教育科学）第51集、2001、PP113-124
- 3) 前掲書1) P152
- 4) 前掲書1) P161
- 5) 水牛くらぶ『モノ誕生「いまの生活」』晶文社、1990、P184
- 6) 直後に出版された環境庁『環境にやさしい暮らしの工夫』1889年は政府刊行物であるが、地球レベルで暮らしを考えるための、わかりやすいテキストとしてインパクトがあった。
- 7) 生活学事典 日本生活学会 TBSブリタニカ、1999、P284)
- 8) 前掲書2) P123
- 9) 神谷宏治・他『コーポラティブハウジング』鹿島出版会、1988、P32